待合室

病との闘いが始まって二年近くになる。どんな高価な物より家族の愛、自然の恵を受けること、これほどすばらしいものはないと痛感しているこのごろである。

いま世上では、医療をめぐるさまざまな問題が話題になっている。

今後、医療技術がいかに目覚しい進歩を遂げ、また制度そのものがいかに整備されようとも、究極のところは医師と患者との温かい人間性に裏うちされた信頼関係こそが、基本ではなかろうかと思う。

多くの人に慕われる医師は、たんなる医者以上の真率な人間の味があるからだと思う。

旅をして心に残るのは、名所旧蹟でも何でもなくて、人々と接したときの人間的交流であるように・・・・。

とにかく人間、この世に生まれてから死ぬまで、苦労は絶えないにしても、生き続けていれば嬉しいこともある。

×　　×　　×

病院の待合室は、世の中の一つの縮図をかいま見ることのできるところである。
年配の男性で必ず夫人同伴で病院へやって来る人はかなりいる。看護婦さんが
「熱は、せきは、」
との問いに返答するのは、患者ではなくて奥さんの方である。夫は口のきけない人のように黙っている。採血ともなると、上着を脱がせ、腕をまくるのも妻である。名前を呼ばれると妻が「ハイ」と答え二人で診察室へ入って行く。医師の問いに答えるのは、すべて妻の方である。各検査室には、妻は入れないので不安な表情で外の廊下で待っている。
若い夫婦の場合、妻のちょっとした病気でも、夫が付き添ってやって来る。問診に答えるのは夫の方である。
近くにいた紳士が
「男はもっとしっかりしてもらわんとなあ」
とつぶやいた。何人かの男性が手を挙げ
「賛成」
と言ったら、近くにいた看護婦さんが声を立てて笑った。
× × ×
通院していると入院生活を共にした人と顔をあわせることはよくある。その人たちは私の容態を尋ねることはなく

「奥さんはお元気ですか」
と必ず言う。私の入院中、妻は昼食の弁当を持参して毎日やって来た。病院食の私と一緒に食事をした。妻がちょっと遅くなると、同室の仲間は
「今日はまだこらっさんね」
と言い、妻の姿が見えると
「ああ、こらした、こらした」
と安心したような声で言った。私が世話になるので同室の人たちに優しく声をかけていた為だろう。
同室だったDさんは、下着を裏返しに着るくせがあった。縫い目が肌に触れるとゴロゴロするというのだ。人には見えるわけでもないからいいだろうが、靴下の場合は人目につくのでやめた方がいいと言ったら、残念そうな顔をした。
かつて知人の入院を見舞いに行くと、ゆったりと寝ている患者がうらやましくて、自分も一度は入院してゆっくり寝てみたい、そう思ったものである。しかしいざ病んで入院し、ベッドに横になってみると、病床というものは楽ではなく、一つの苦行であることを思い知らされた。特に手術後は自力では体を動かすことが全くできなかった。
人は笑うかもしれないが、私の秘かな願いであった、平戸の松浦藩のある下級武士とその妻の、壮絶な生と死を扱った時代小説「峠の風」(仮題)を少しでも書き進めるチャンスと思っていたが、全く書けなかった。

十二年ほど前、松浦藩の一族の子孫である友人と平戸の山中で、不思議な形をした墓石らしいものに出合った。友は切腹を思わせるなと言い、興味を示した。その後二人で多くの資料を調べた。三年に及ぶ調査で漠然とではあるが、あることが浮かび上がって来た。そんな折、友の突然の死で中断したままであった。才能がないのは承知の上で、小説の形をとって、あの墓石の主らしい下級武士のことを書き残したい、そう思っているのであるが・・・・。

人生の中で、私たちが経験する別れというものは、さまざまなものがある。

またいつ会えるかわからないというのは、特に親しい人との間では、不安であり、ふと永遠の別れという感じを秘かに抱いてしまうようである。

遠い東北の地へお嫁に行く娘さんが、病室のFさんを訪ねて来た。幼くして母と死別、長い間父と二人きりの生活で家事を続けてきた娘さんである。

彼の胸中に、泉のようにあふれるものがあったに違いない。彼は生きて再びわが娘の顔を見ることはもうないだろう、そんな思いからか、感情を押さえ、眉間に皺を寄せ、早口に言った。

「いろいろと長い間、世話をかけてすまなかったな。わかっていると思うがもう俺も長くはない。どうか幸せになってくれ。大事な結婚式に出席できなくて本当にすまない。親らしいことは何一つしてやれなかったなあ」

彼は言い終わると同時に、両手で顔を覆った。そして娘さん名義の二十数年に及ぶ預金証書類と印鑑を差し出した。娘さんは驚き声を出して泣いた。

やがて娘さんは泣いた痕の残っている顔で寂しげな笑みを浮かべ、小さく手を振って、ゆっくりと背を向けて歩きだした。

振りむきたい気持ちを押さえているためか、彼女の肩は小さくふるえていた。